第二十六卷　第二號　二四二

關羽祠廟の由來並に變遷（二、完）

井上以智爲

一、序　說
二、唐代創草期（以上前號）
三、宋元發展期（以下本號）
　其一　宋代の發展
　其二　元代の發展
四、明代最盛期
五、清代整頓期
六、結　語

三　宋元發展期

其一　宋代の發展

宋代に於ける關羽祭祠廟の變遷は之を官私の兩廟に大別して攷察するを便とする。

一、宋代官祭廟は次の事項に就いて攷察するを要する。

一	北宋	太祖	開寶三年九七〇十月	「詔置守冢三戶。…致祭。長吏奉其事。」(『文獻通考』一〇三、宋廟考。)
二		眞宗	大中祥符六年一〇一三	「命荊門軍以公錢修葺故廟。」(『關聖陵廟紀略』三。)
三		仁宗	慶曆中一〇四一—一〇四八	武成王廟從祀。「依舊配享。」(『續通志』一一四、禮略、太公廟。)
四		神宗	元豐四年一〇八一	玉泉寺關廟改修。「廟宇鼎新。」(『山右石刻叢編』二一、張商英「重建關將軍廟記」。)
五		哲宗	紹聖三年一〇九六	「玉泉寺關廟賜額。曰顯烈。」(『輿地紀勝』七八、荊門軍。)
六		徽宗	崇寧元年一〇二	「追封忠惠公。」(『關聖陵廟紀略』二。)
七			大觀二年一〇八	「加封武安王。」(同　上)
八			宣和五年一一三〇	「勅封義勇武安王。」(同　上)
九		南宋	建炎二年一一二八	「加封壯繆義勇王。」(同　上)
一〇		孝宗	淳熙十四年一一八七	「加封英濟王。」(同　上)

北宋太祖開寶三年九七〇十月に歷代忠臣烈士二十三名を選び、その功績を表彰する爲めに各墳墓に守冢三戶宛を置き地方官にその祭祀を司らしめる制を定めた時、關羽も劉備・諸葛亮・張飛等と共に之に與る光榮に浴した。謂ふ所の關羽の墓地については古來異說もあつて未だ之を適確にするを得ない。關羽の墳墓については現に傳へられるもの三箇處ある。關羽終焉の地たる漳鄉に於てその遺骸を葬つたと傳へられ、宋未以來その祭祀を繼續する當陽縣城西北五支里の地にある關帝陵廟がその一、關羽の沒後その元首を當時洛陽に在つた曹操の下へ送附すると、曹操は之を厚葬した

處と傳へられる洛陽城南十五支里に在る塚廟はその二、而して蜀を領有した後に劉備は關羽の死去を悼みてその衣冠を以て招魂葬送した華陽縣南の華陽墓廟はその三である。①太祖が守冢三戸を置いた關羽の墳墓は果してその中の一か、或は更にそれ以外にあるか判定し難い。『湖北省通志』②に當陽縣關帝陵廟を以て之に充てゝあるが、同陵廟の由來については後に述べる樣に、その祭祀は南宋孝宗淳熙十五年一一九〇に始まり、陵廟の建設されるのは明憲宗成化三年一四六七であることが明白であり、且つ此の地から約二十五支里ある玉泉寺の關羽祭祀廟卽ち伽藍神廟が中唐以來存在し、やがて哲宗紹聖三年一〇九六に「顯烈」てふ廟額を賜與されるから、その由來傳統が甚だ明白顯著なるに關らず、その近くにある墳墓に於ける儀禮については何等徵すべき資料の存在しない點から考へると、關帝陵廟の地點は太祖の時守冢を設ける墓地に指定された形迹は全く認められない。蓋し關羽終焉の地たる漳鄉の地に墳墓が古く造營されたに相違なく、且つその地點は玉泉寺から程遠からざることも推定に難くないが、それが果して現關帝陵廟の地であるとも又開寶三年守冢設置の墳墓であるとも何れも未だ明確にするを得ない。曹操が洛陽に於て關羽の元首を葬つた史實は明確であるが、所謂洛陽縣南の冢廟については明代以前の資料は未だ見當らない程であるから、恐らく宋代の施設とは沒交渉であつたと想はれる。而して華陽墓廟については、北宋英宗の頃成都に在任した趙抃の「成都古今記序」に「荷聖寺有榜。曰關公墓。③」とあり、同墓の存在は夫れより約七十年以前の太祖時代にも既に認知されたに相違なく、且つ其の地は蜀主劉備が親しく關羽を葬祭した遺址てふ史的由緒もあるから、開寶守冢の墳墓は或は此の地であるかも知れない。要するに太祖が守冢制を布いた時の關羽の指定墳墓は恐らく此れ等兩者の一であるが、當陽陵廟又はその附近の地は

史的背景に富むことゝ、北宋首都汴京開封との地理的關係とを併せ考へると、華陽墓廟よりも一層多く可能性が有る樣に想はれる。守冢制度指定墓地との關係は不明であるが、中唐玄宗の頃一私廟として創設された玉泉寺の關羽祭祀祠廟は北宋初期に祀典に列し、眞宗の時公錢を以て修葺したとの說もあり、④更に哲宗紹聖三年一〇九六「顯烈」てふ廟名を賜與されて⑤官祭祠廟的特色を發揮することは、同廟發展史上劃期的緊要事であり、同廟がやがて官祭代用祠廟に進展する一階梯をなすものである。

關羽祠廟の官祭廟化することはその封號追賜の上から最も明白に知られる。三國以來壯繆侯であつた關羽は北宋末期から南宋初期に到る二十餘年の極めて單期間內に、忠惠・義勇・武安と追封されて侯から公・王に進展する。その字面は何れも關羽生前の忠武を表象する徽號であることは、⑥當時北滿に勃興して南下し中原へ進出した金國が北宋を壓迫强襲するに對して、宋朝の君民が外敵擊攘の爲め神明の加護救援を仰望する、國家的民族的欲求を反映するもので、關羽は此の非常時局特殊情勢下に在つて時艱兇服の威力ある神明と認められたからに外ならない。而して南宋孝宗淳熙十四年一一八七英濟王に加封されるのは、「靖康之難」以來半世紀に亙る宋金の反自敵視も、金に小堯舜の稱ある賢明仁慈なる世宗出でゝよく內外の和平に力め、南宋も亦一代の名主たる孝宗君臨して巧に强敵金軍を擊退してその强壓から脫離し、漸く之と和親を結びて國交の調整を計り、國難を排除して上下の安態を齎したるは、一に北宋以來武神關羽の甚大なる加護に據るものとなし、感激報謝して神德を顯彰せんとする意圖を表現するものに相違ない。但し賜封の勅文中に「凡有禱于水旱雨暘之際。若或見于愁苦悽愴之間。⑦」とありて、神明は恰も國內の氣象的天災救護に貢獻

したやうに誌して、當時の國際問題に觸れないのは、國際的和平親善を目的とする一種の外交的辭令に過ぎないのであらう。英濟王勅封の告文は玉泉寺顯烈廟に宛てたもので同廟に保管された點⑧から、顯烈廟は當時關羽祭祀の官祭代用廟であることは明白であり、此時を遡ること遠からざる而も事實の互に連絡繼續する徽宗高宗時代の勅封も亦同樣に同廟に宛てたものであり、同廟は當時官廟同格であつたことは想像に難くない。

かくて中唐より存在する玉泉寺內の私的關羽祭祀祠廟は北宋末期に顯烈てふ廟名を賜與されて稍官廟的色彩を帶び、「靖康之難」前後よく國難麥莫に貢獻して英濟王の榮號を賜與され、恰も關羽官祭祠廟の觀を呈するまでに飛躍的發展をなしてゐる。而して關羽は中唐以來武神を代表する武成王呂尙と同格の優位を占めるが、然し之より先き仁宗慶曆中、既に漢壽亭侯として武成王廟に從祀される中唐の舊制が復活されて居ることは注意を要する。一面漢壽亭侯として武成王下に從祀され、他面武成王と同格なる英濟王に進展して、關羽は同時に跛行的兩相を有することは、或は傳統的因襲復活と革新的新制施行との相互に矛盾する兩種儀禮の濫用に基因するとも考へられ、かゝる濫用は國難的混亂裏に於ける過渡的變態的施設であるとも謂ひ得る。但し此の種の跛行的變態は各種の祭祀中往々視られることであり、殊に此の場合に於ては首都汴京の武成王從祀の漢壽亭侯と當陽縣玉泉寺內伽藍神廟を代用する官祭上の英濟王とを、强いて並立對照せしめてその間の撞着矛盾を指摘するのは、一種好事家的言說に外ならないもので敢て異とするに足らない。凡そ一般士民の崇拜し把握する關羽は單に形式的儀禮化した武成王從祀の漢壽亭侯ではなくして、顯烈廟に於ける伽藍神又は伽藍神が代理する官祭上の英濟王であるから、關羽尊崇には實際上何等の支障もなくやが

て同廟は空前の飛躍をなしてその黄金時代となるのである。

二、宋朝若民が遼金等新興外敵の壓迫に惱み、只管その厄難を拂撒せんとして慘憺苦慮する際に當つて、顯烈廟は外難とは比較的交渉尠き安全地帶に在つて地の利を占めて居ること、その主神關羽は忠勇武烈なる護國武神であると同時に天下四絶の一なる玉泉寺を背景とする邪惡剋服の伽藍神であることなど、よく時代の要求に適應して國難芟夷に貢獻する處多大なりと視られ、かくて南宗孝宗乾道九年一一七三頃には既に天下伽藍神の本宗となり、やがて淳熙十四年一一八七英濟王に追封せられて舉國的歸依崇敬を集中し、南宋中期の顯烈廟は愈々その最盛黄金時代となるのである。斯樣にその崇敬が昂揚しその信仰が透徹すれば、關羽祭祀は益々興隆し啻に武神・伽藍神としてのみならず、更に士民生活の安定福祉を庇護增進する、弘義の財神に飛躍的發展をなす情勢も自ら其の間に萌し、又その單獨祭祀祠廟も顯烈廟を中心として各地に建立增設せられる機運を促進する。

宋代に於て造營されたる關羽祭祀單獨祠廟は北宋初期より存在する華陽墓廟を初めとし、寓目せる文獻上明白なるものは次の通りである。

一	華陽關羽墓廟	(四川省華陽縣)	北宋初期	存	武神廟	(『四川省通志』四四、陵墓。)
二	沁州關羽廟	(山西省沁縣)	北宋神宗元豐三年一〇八〇	建	武神廟凱旋記念	(『山西省通志』九四、金石記。)
三	吳縣關羽廟	(江蘇省吳縣)	同　四年一〇八一	存		(『寰宇訪碑錄』一〇。)⑨
四	建康關羽廟	(南　京)	南宋寧宗慶元中一二九五―一三〇〇	建		(『洪武京城圖志』。)

五	興平縣關羽廟	（陝西省興平縣）	金慶帝大安二年一二〇	存	（『寰宇訪碑錄』一〇。）⑨
六	解縣關聖廟	（山西省解縣）	南宋中期	存	武神廟
七	潼州關雲長廟	（四川省縣陽縣）	南宋	存	（『弘治本三國志通俗演義』一六。）（『異堅志』甲九。）

以上は何れも民間信仰の結晶たる關羽祠廟であり、此外既に湮滅に歸した幾多の祠廟が當時存在したことゝ想像される。清の趙翼が二三の事例を掲げて「宋時關王廟亦已多。」⑩と誌すのも亦恐らく同樣の主旨に基くものであらう。此れ等諸廟中特に異彩を放ちやがて代表的地位を占めるものは解縣に於ける關聖廟である。

關羽出生地に於ける代表的祭祀廟たる山西省解縣城西門外百步許の關聖廟の創建については未だ之を詳にしない。解縣の東北約五里の運城は一名司鹽城とも稱せられ古來晉南鹽池文化の中樞をなしてゐる。鹽池は既に秦漢以來有名であり、殊に鹽池神に關する唐宋の文獻も多數現存して當時の盛況をも窺知し得るのであるが、その文化圏内とも視られる解縣城頭の關羽祠廟に關する適確なる唐宋の資料の見當らないのは、當時未だ同廟の存在しなかつたことを裏書きするものではなからうか。但し此の地の關羽祠廟の宋代創設に關する鹽池神と蚩尤とに關聯する附會傳說は二種類ある。一は北宋眞宗大中祥符七年蚩尤が鹽池を騷がした時、關羽が陰兵を卒ゐて之を打倒したから、關羽の功績を賞揚して之を祭祀するとなす說で明末の『野穫篇』にあり、他は之と殆同樣の內容であるが、唯だその時代は異つて北宋末徽宗崇寧中のことにして、之が爲に關羽は崇寧眞君に封せられたと說きて『明弘治本三國志通俗演義』にある。恐らく兩說とも更に古くから流布し且つ後說が先づ發生して然る後に前說がそれから派生したやうに想はれるが、兩說

とも北宋時代の開基附會說であるから、同廟は古くとも北宋崇寧以前には未だ存在しなかつたものと推定せられる。解縣東方十八支里の常平村は關羽の父祖居住地として知られるが、金世宗大定十七年(一一七七)即ち南宋孝宗淳熙四年に此の地に「漢大王祖宅塔」が建設せられた。[12] その碑文は素朴なる鄉土民衆の手に成るもので、內容杜撰であり關羽に對する認識も極めて淺薄な點から推して、當時解縣城頭の關羽祠廟が假令存在したにしても甚だ微々たるものであつたことを想像せしめる。然らば同廟は眞宗大中祥符甲寅(七年)に關羽が蚩尤を打倒した功績を賞揚して同年勅建され、哲宗元祐壬申(七年)の勅修と稱する開基傳說は元より信憑するに足らない。[13] 同廟の創建期は祖宅塔建設の頃であるが、然し後に述べる樣に元初既に同廟は堅實なる基礎を有して居るから、多分南宋以後であらうと想像せられる。

其二　元代の發展

元代に於ける關羽祭祀祠廟の變遷は、(一)顯烈廟の復興、(二)解縣關聖廟の擡頭、(三)關羽祠廟の普及の諸點から攷察するを要する。

一、南宋末蒙古忽必烈の大軍が南下して襄陽・鄂州(武昌)を席捲するに當りて當陽縣も亦その戰禍に見舞はれ、顯烈廟は當陽縣東南の萬城に神位を奉遷して一時閉鎖の止むなきに到るが、其の後十餘年を經て忽必烈は帝位に卽き天下統一の業を完くする頃、玉泉寺僧徒等は同寺域內に顯烈廟を復興する。佛敎を尊信すること篤い世祖忽必烈は關羽を崇敬して佛敎監壇たらしめるが、[14] その結果伽藍神たる關羽の地位を一層强化し堅實ならしめて、天下伽藍神廟の本宗たる顯烈廟は復興以後元代佛敎界に異彩を發揮する。

二、解縣城頭の關聖廟は世祖が天下一統を完くして數年後の至元二十年（一二八二）に行中書省平章政事・察罕帖穆爾が祭祀を擧行した點から考へて、此の廟は當時既に堅實なる基礎背景を有して居るが推定される。[15] 其の後四十年を經て文宗天曆元年（一三二八）九月、關羽に顯靈ていふ封號を賜與され顯靈義勇武安英濟王[16]となるが、此の封號を正式に受納する祠廟は玉泉寺內の顯烈廟であるか、或は解縣關聖廟であるか未だ之を明確にするを得ない。傳統的背景に富む顯烈廟よりも當時の京師大都（北京）との交通關係が便利であることから推して、寧ろ解縣關聖廟であるやうに考へられ、而して封號の字面が靈異的色彩を帶びて居ることは一層此の想像を强からしめる。解縣關聖廟の靈異的色彩を有することは、同廟創建に因む蚩尤打倒說に關係深き「關雲長大破蚩尤」てふ元代製作の戲曲の存在すること、並に之に關聯する同廟神明の別名たる崇寧眞君名の存在することからも窺はれる。順宗至正十三年（一三五二）四月山西省南部の鄕寧縣（臨汾縣西方）に建設された「關廟詔」碑[17]文中に「齊天護國大將軍……壯穆義勇武安英濟王崇寧護國眞君」等、極めて道教的色彩濃厚なる關羽徽號が誌され、殊に其の中に蚩尤打倒說と關係あり、且つ明代に到つて解縣關聖廟の道教的特徵となる崇寧眞君の稱號の存在することから、當時晉南地方に同廟を中心とする關羽の道教的崇拜が流布して居り、且つ同廟の蚩尤附會傳說も既に發生して居るやうに想像せられる。若し此の想像が認容されるならば同廟は佛教監壇たる顯烈廟と對蹠的に存在するもので、兩者は實に元代に於ける道佛二教の二大代表であり、關羽は道教神明として茲に劃期的躍進をなすのである。

三、宋代に於て既に單獨關羽祭祀祠廟は各地に建設せられたが、元代に到ると一層その風は盛になつて幾多の祠廟

が存在する。元代重修説の北京雙關帝廟は姑く措き、筆者座右の資料中からも左の數種を列擧することが出來る。

一	武安王廟	（山西省平定縣）	仁宗延祐 元年一三一四	存	重修	（『山西省通志』九六。）
二	關帝廟	（山東省莘縣）	晉宗泰定 四年一三二七	重修	（『寰宇訪碑錄』一二。）⑱
三	關王廟	（河南省郟縣）	寧宗至順 三年一三三二	創建	（同 一二。）
四	關帝廟	（山東省高唐縣）	順帝元統 二年一三三四	重修	（同 一二。）⑱
五	關王廟	（河南省許昌縣）	順宗至正十二年一三五二	存	（同 一二。）
六	關侯廟	（山西省鳳臺縣）	順宗至正十四年一三五四	存	（『山西省通志』九六。）
七	關帝廟	（山東省掖縣）	順宗至正二十七年一三六七	存	（『寰宇訪碑錄』一二。）⑱

以上は何れも碑文の存在する點から推測して規模比較的弘大なるものであり、此の外本來碑石の無つたものなど幾多祠廟の存在したことは想像に難くない。元初の李俊民が「關公廟祀徧天下。端人正士義其忠。武夫勁節壯其勇。田畯村嫗攝其神。⑲」と誌す樣に、元初既に各地に關羽祠廟が普及して或は武神としてその忠勇を景仰し、或は財神としてその庇護を祈願するから、從つてその祠廟中には在來の武神廟以外に財神廟も既に存在したことゝ想像される。

以上宋元時代の關羽祭祀を大觀するに、中唐に起源を發する玉泉寺伽藍神廟が宋代に到ると、よく時代の要求に順應して官祭代用廟ともなつて、儒佛兩面の祭祀が興隆して飛躍的發展をなし、その崇敬は漸く上下に浸透する。嗣いで元代に到ると解縣關聖廟を中心に道教的尊崇が擡頭する。かくて道佛二教に亙つて對蹠的發展をなし、その信仰が一層高潮して弘く各地祠廟の建立增設となるから、關羽の道觀伽藍神となるのも亦恐らくこの頃からであらう。

註①『四川省通志』四四、陵墓。『大清一統志』。
②『湖北省通志』一八、「當陽縣西北五（支）里。古漳鄉地。公墓在焉。宋開寶中建祠。置守冢三戶。」
③『關聖陵廟紀略』三。『四川省通志』四四、陵墓。吳省欽「重修關陵碑記。」
④『關聖陵廟紀略』二。
⑤『輿地紀勝』七八、荊門軍。
⑥關羽賜封の王號は『關聖陵廟紀略』二。及び『陔餘叢考』三五、「關壯繆」にあるが、未だ之に關する宋史を始め權威ある資料を寓目するを得ないのは、恐らく宋朝多事の際で資料の多くは湮滅に歸したからであらう。
⑦『關聖陵廟紀略』三。
⑧同三。
⑨『寰宇訪碑錄』一〇、「關帝眞身瑞像歷年記」碑石の發見から同廟宇の存在を推定し得る。同文に關帝廟とあるのは碑錄編輯期たる清代の通稱に據つたもので、宋代の名稱ではないから假に之を吳縣關羽廟と誌した。
⑩同上の「關帝廟趙門白氏捨地題名」に據つて表記の通り誌した。
⑪『陔餘叢考』三五、「關壯繆」。
⑫「山右石刻叢編」二一。及び『關聖陵廟紀略』二。「漢大王祖宅塔」碑文中に誌す年代は史實と約百年の差異もあつて甚だ杜撰である。
⑬『關聖陵廟紀略』二。
⑭『陔餘叢考』三五、「關壯繆」に「元史。世祖尊崇佛教。用漢關壯繆爲監壇。」とあるが、未だ元史に就いて直接寓目するを得ない。
⑮『關聖陵廟紀略』二。
⑯『元史』三二、文宋本紀。

⑰『山右石刻叢編』三八。

⑱ 廟名中に關帝廟とあるのは何れも清代の慣用に據つたもので當時の原名ではない、

⑲ 李俊民の文獻は『元明事類鈔』二。「神鬼門」に在るさうであるが、未だ同書並にその原文を寓目するを得ない。

四　明代最盛期

明代に於ける關羽祭祀は飛躍的に大發展をなしてゐるからその祠廟の攷察は之を數項に分割するを便とする。卽ち武成王從祀の傳統を揚棄して新に中央官祭祠廟たる白馬廟の創建がその一、中央官祭祠廟と相對的地位に在る民衆的中央代表廟たる月城廟の隆昌がその二、當陽陵廟の興隆と各地關羽祠廟の增設がその三、而して關羽崇敬の念が官民上下に透徹して之を大帝と稱することがその四である。

一、唐宋時代に孔子を祭る文廟と同格の地位を占めた武成王廟は明初太祖洪武二十一年一三八八その祭祀を廢止する。①但し武成王は之より先き洪武六年創建の歷代帝王廟內に諸葛亮等三十七名と共に從祀されるが、關羽は其の際並に其の後の從祀に與らないから關羽從祀三百年の傳統的祭祀は其の時を以て消滅する。太祖はそこで洪武二十七年金陵南京雞鳴山南麓に漢前將軍壽亭侯廟を造營する。②同廟は洪武二十八年の序ある『洪武京城圖志』に據ると、「關羽廟舊在針工坊。(南)宋(寧宗)慶元年間一一九四―一二〇〇建。今徙雞鳴山南。」とあつて、南宋以來存續する私廟を移轉して官廟に更改したもので、所謂「南京十廟」の一に數へられて京師に於ける關羽官祭單獨祠廟の嚆矢である。成祖永樂帝が「靖難之變」以後北京に奠都してからも亦同樣に關羽を祭祀し、その祠廟も亦「北京十廟」の一に數へられるが、③その位置を明確な

らしめる資料は未だ見當らない。北京の代表的關羽祠廟については『續文獻通考』に「詔建漢壽亭侯廟。……永樂中。北京始建廟。至是(憲宗成化十三年一四七七)特建廟於宛平縣東。④」とある。謂ふ所の永樂始建廟の位置並に同廟と成化詔建漢壽亭侯廟との關係は明確ではないが、後者の位置を宛平縣東と誌す點から同廟は宛平縣東卽ち地安門外の西に現存する通稱白馬廟と恐らく同一であらう。而して所謂成化詔建漢壽亭侯廟も亦多分同年の創建ではなく、永樂始建の舊廟を改修擴張して詔建と誌すもので、此等兩者は全然同一のものと想像される。但し漢壽亭侯廟(白馬廟)の創建期は洪武中との說もある。明中期の商輅が「漢壽亭侯廟在都城西北隅。蓋洪武中建。我太宗文皇帝(永樂帝)嘉侯功烈。⑤」と該廟について誌すのは、永樂帝北京城郭改築以前の同廟の位置を指示して居り、帝が燕王として洪武中始めて此の地を領有した頃に創建したものと推定される。成化十三年の同廟擴張について商輅は「嫌于窄隘。……市民居房地。展之幷付本廟。永奉香火。內植松柏。外列垣墻。規模廣大。觀者起敬。⑥」と誌すから、改修以後の同廟は必ず官廟たるに相應する大規模となつたであらうが、擴張以前の同廟は燕王として建立した頗る狹少なものであつた樣に想像される。而して太祖は洪武元年原封に復して單に(漢)壽亭侯⑦となし壯繆武安等の封號を撤去したのは、同五年「凡後世溢美之稱皆革去。⑧」と同一主旨に基く復古的肅正策を實施した結果であつて、明初の同廟は名實ともに狹少貧弱であつたことが窺はれる。尙ほ明一代は此の廟を以て代表的官祭祠廟となし定期の祭祀を施行した。⑨

二、白馬廟の外に北京には尙ほ明初創建の一關羽廟がある。卽ち洪武二十年正陽門前月城(瓮城)右側內に創建せられた月城廟がそれで、同廟は同時に創建された月城左側內の觀音大士廟と相對的地位を占めてゐる。斯樣に觀音と關羽と

が相對的地位を占める樣になつた由來については未だ明白にするを得ないが、現世に於ける苦厄を救濟する觀音と財福を施與する關羽とが、現實的功利的な漢族の民俗性によく適合するから、道佛二敎の各代表として祭祀される譯である。此の思想は單に此れ等二廟に於て視られるだけではなくて明末に到ると南滿各地にも普及し、やがて淸朝宮廷シヤマン祭祀に於ても此れ等二神が釋迦と共に主要祭神となる程であるから、月城廟は後に述べる樣に財神としての關羽祠廟の代表的なものである。此の廟は白馬廟の如く地形上擴張の餘地はなく明初以來現代に到るまで、その局限された地域內に在つて極めて小規模ではあるが、然し地の利を占めて朝野の崇敬甚だ篤く、凡そ北京に到るものは必ず參詣する慣例となつて、關羽の崇敬愈々昂揚すれば此の廟の信仰愈々興隆したことは明末焦竑の月城廟碑文等から容易に窺知される。

以上の二廟は明代に於ける關羽祠廟の二大代表であつて、一は關羽の忠勇武烈を追慕讃仰する德敎的武神官祭廟であり、他は福祉安生を祈願する道敎的財神私廟である。明末の「春明夢餘錄」に此れ等二廟以外に金魚池畔の姚彬關王廟を揭げて北京關羽廟の三大代表となして居るが、北京には當時元代より存續する雙關帝廟を始め尙ほ大小八九の私廟の存在したことは『日下舊聞考』などに據つて明白に知られる。

三、明代地方關羽祠廟中異彩を放つものは、史的背景に富み現に當陽縣關帝陵廟と稱せられる關羽陵廟と解縣關聖廟とである。當陽縣關羽陵廟の由來は顯烈廟と密接な關係がある。顯烈廟の東方二十支里卽ち當陽縣城西五支里に在る關羽の墓地の明白になつたのは南宋以後であつて、南宋孝宗淳熙十五年十一月英濟王追封の勅文が當陽縣に到着し

た際に、之を管理する荊門軍守・王銖が關羽の墓地に始めて祭亭を建て垣墻を環らした⑩時からである。元初顯烈廟復興を計つた際にその附近に在る墓地に對して如何なる施設をなしたか不明であるが、明景宗景泰四年一四五三、冢前の廟を復建した⑪とあるのが信憑し得るならば、景泰より尠くとも半世紀以前卽ち明初永樂帝の頃から廟宇が存在する筈である。而してその陵と廟とを併合した新設の陵廟は憲宗成化三年一四六七から着手して同十五年に竣功する⑫。かくて顯烈廟が是れ迄占有した公的特殊性は爾後新建の陵廟に移動し、顯烈廟は單なる伽藍神廟に還元する。此の陵廟は其の後世宗嘉靖三十五年一五五六司禮太監黃錦等が白金二千五百兩を醵出して重修する。當時權勢を恣にした宦官等が重修に努めたのであるから必ず壯麗を極めたに相違ない。かくして顯烈廟から派生した佛僧の司祭する同廟は明代地方祠廟中の代表的なものとなる。

解縣關聖廟は元以來這教的色彩を帶びて居るが、明代に到ると、それが一層濃厚となる。此の廟の史的背景をなす元曲「關雲長大破蚩尤」の思想は、明代に到つて弘く士民上下に浸透することは、明中期憲宗成化十七年一四八一勅祭の告文中に蚩尤打倒說の誌される點⑬からも明白に知られる。更に明末神宗萬曆に到ると道教祠廟として同廟は一大飛躍をなして居る。卽ち

萬曆二十二年九月以解州崇寧宮道士張通源題請。敕解州廟名曰英烈。(『關聖陵廟紀要』二。)

萬曆二十二年因道士張通元之請。進爵爲帝。廟曰英烈。(『陔餘叢考』三五、「關壯繆」。)

此れ等兩資料を對照綜合して視ると同廟の別名たる崇寧宮道士張通玄⑭の申請に基き同廟へ「英烈」てふ廟名と共に帝

號を賜與されたことは明白であり、その帝號は多分協天護國忠義大帝[15]であることも想像に難くない。然らば此の賜號は後に述べる樣に、關羽祭祀の最高潮に達する神宗萬曆四十二年月城廟神への大帝賜號の先驅をなして、解縣關聖廟は道教的祭祀發展の大飛躍をなす指導的樞軸となつてゐるから、同廟は當時各種の關羽祠廟中の最高地位を占めるやうに推定される。

四、斯樣にして白馬・月城の首都代表二廟を始め、當陽縣關羽陵廟・解縣關聖廟が各地に角列して、明代關羽祭祠の高潮を偲ばしめるが、憲宗成化十年前後に亙りて、或は增修され或は官祭されてその崇敬を昂揚し、更に神宗萬曆に到りて愈々其の最盛期に入るのである。萬曆二十二年解縣廟が「英烈」てふ廟名を賜與され、洛陽塚廟に「義烈」てふ賜額あり、尙ほ之と前後して當陽陵廟に「顯佑」の廟號を賜與されて居るが、嗣いて萬曆四十二年月城廟に帝號を授與されて其の尊崇最高潮に達する。かゝる躍進的趨勢の由來については想ふに大略二要因が存する樣である。宋元以來流行する小說戲曲等大衆文藝を通じて、關羽は民俗的英雄となるが、明代に到ると一層その崇敬の昂揚することがその一、明中葉以後國難驅攘を極めるに際して武神關羽の靈驗信仰が深く人心に滲透することがその二である。所謂小說は宋代に發生し、小說中『三國志』を顯材とするものが多く宋元の間に流布したことは、既に王靜安の詳述する[16]處に據つて明白である。但し『元至治本全相平話三國志』は關羽の終焉については極めて輕く取扱つて居り、『明弘治本三國志通俗演義』に視られるが如き、關羽と玉泉山並に蚩尤との靈驗的話說については毫も誌す處がないから、此の種の靈驗說は概ね元末以後に附會されたものと想像される。小說よりも一層大衆的である戲曲が更に關羽を民俗的英雄な

らしめたことも亦王靜安の「宋元戲曲考」[17]から明白に窺はれる。民衆演藝の隨一ともいふべき紙芝居式の影戲は北宋仁宗一〇二三―一〇六五の頃から始まり、南宋に到り弘く流行して元明戲曲の濫觴となつて居り、元明戲曲中には『三國志』を中心となし殊に關羽に關する題材が甚だ多くして王靜安の「曲錄」に據ると、表題の上から關羽に關係あること明白なるものは元代作中に十二明代作中にも一つあるから、若し內容の上から檢討するならば更に多數に上るであらうと想像される。而して「關雲長大破蚩尤」てふ表題も已に元代作中にあるから、解縣關聖廟由來に關する蚩尤靈驗說が既に元代に存在すると推定し得ることは上述の通りである。明孝宗弘治甲寅七年一四九四の序ある『明弘治本三國志通俗演義』の「玉泉山關公顯聖」中に、汜水關鎭國寺の長老・普淨禪師と關羽との問答を誌し、唐高宗儀鳳中神秀と關羽との關係を『後傳燈錄』から引用し、尙ほ又蚩尤伏滅の崇寧眞君をも附記して居るが、此れ等は何れも唐代に發する智者大師と關羽とに關する靈驗說から派生した第二次的靈驗說であらう。かくして元明時代に於ても關羽崇敬が大衆層に透徹し、玉泉寺伽藍神中心の佛敎信仰及び解縣の蚩尤打倒說基調の道敎的崇敬が、史實に基く武神說、武神說を背景とする伽藍神乃至財神觀と相互に因果關係をなして關羽信仰を愈〻旺盛ならしめた樣である。世宗嘉靖十六年一五三七重修の『遼東志』に據ると、遼東都司義州衞・寧遠衞・瀋陽・海州・蓋州等の南滿要地の山川地理圖には何れも關王廟の所在が明記されてゐる。南滿が斯樣であるから中原には關羽祠廟が一層普及して居つたことゝ想像せられる。

武神としての關羽尊崇は萬曆前後の國難に際して更に高潮する。我が文祿慶長の役卽ち明萬曆朝鮮役に當りて、明の將兵は朝鮮各地に於て我が出征軍と苦戰を交へて居るが、彼等の中に關羽を崇敬する者多く、關羽祠廟を戰地に建

設したものも尠くない。『燃藜室記述別集』[15]に記載する處の次の六種はその代表的なものであらう。即ち

一	古今島關王廟	全羅南道康津	慶長二年（萬曆二五一五九七）	陳璘	建。
二	星州關王廟	慶尙北道星州	同　上	茅國器	建。
三	南大門關王廟（南關王廟）	京城崇禮門外	慶長三年（萬曆二六一五九八）	陳寅・楊鎬等	建。朝鮮政府協力。
四	安東關王廟	慶尙北道安東城內	同　上	薛虎臣	建。
五	南原關王廟	全羅北道南原城西門外	慶長四年（萬曆二七一五九九）	劉綎	建。
六	東大門關王廟（東關王廟）	京城興仁門外	慶長四―七年（萬曆二七―三〇一五九九―一六〇二）	明朝廷	建。朝鮮政府協力。

此れ等六廟は何れも此の戰役の後期即ち慶長之役に創建され、而してその前期たる文祿之役並にそれより以前には朝鮮關王廟の存在した形跡はないから、上記諸廟は恐らく同國關王廟の濫觴であらう。上記諸廟中古今島・南原・星州及び安東の四廟は、半島南部の全羅・慶尙兩道を西南から東北へ縱斷する一線上に位置して居り、何れも明軍前線將士の歸依を獲たに相違なく、殘餘の二廟は明軍の一基地たる京城に在つて明・鮮協力の造營ではあるが、創建に際して兩者の間に複雜な波瀾を惹起してゐる。

京城南面の崇禮門即ち南大門外の南關王廟は慶長三年萬曆二十六年の創建である。明廷の朝鮮派遣軍々務經略・楊鎬が麻貴・陳寅等諸將軍と共に我が遠征軍と會戰し、同年一月蔚山に於て苦戰に陷り遂に大敗北を喫した。楊鎬等は倉皇師を撤して京城へ遁れ歸り、詐つて捷利と報告したが、幾許もなく敗狀が暴露して、同年六月丁巳四日楊鎬は罷免される。陳寅は上記蔚山の敗戰で彈丸に中りて負傷し、京城に歸還して療養を事とする時、崇禮門外山麓の地を卜して關羽奉

祀の廟宇を造營する。京城に遁れ歸つた楊鎬は此の事を知り麻貴と共に各自銀五十兩宛を醵出して祠廟の擴張を慫慂すると、明軍武將中には之に倣ふ者も多く、[19] 京城政府も亦之と協力せざるを得なかつた。かくて陳寅は自ら工務を董督して竣成に努め、同年五月十三日の關羽生誕日大祭に際し楊鎬等は朝鮮國王の行禮を要請する程に、朝鮮官憲に對して高壓的態度に出で、朝鮮側は明軍の横暴に對する反感が甚しく當初容易に應諾する色もなかつたが、然し漸次その態度を改め同年八月十六日に明・鮮將士は同廟内に參籠會盟し、而して同九月十九日鮮軍出動に際しては自發的に同廟へ參拜祈願する程に鮮人間にもその信仰が漸く浸透する。陳寅が南關王廟を創建する主旨については未だ明確にするを得ないが、贊助者楊鎬の眞意を忖度するに、多分失態挽回名譽恢復の爲め專ら神明の加護を念願するにあつたに相違なく、恐らく明軍將士多數の意圖も亦同樣であつたと想はれる。東關王廟建設は然るに之と異り、その目的は主として神佑報謝靈德顯彰の爲めであつた。同廟は戰塵全く鎭つた萬曆二十七年八月明廷寄贈の四千金を以て京城政府之を造營する。而してその造營は戰後國力の疲弊愈々甚しき積弱の同國政府にとりて痛苦堪え難いことは、起工二箇月前の『李朝實錄』中に「又於東郊。大興工役。孑遺之民。安得以爲生乎吁。」[20]とある點からも容易に窺はれる。工役等に關して兩者の間に屢次紛爭を重ね、漸く告成するのは四年後の萬曆三十年である。戰役中關羽靈驗に關する具體的な資料は見當らないが、慶長三年八月我が秀吉の薨去を仄聞した鮮軍中には、之を靈異的に解釋したものもあるから、[21] 明軍は猶さら之を問題視したと想像せられる。斯樣に漢族が萬曆朝鮮之役に當り篤く關羽を信奉して祠廟を建設する程であるから、その前後に起つた國難特に倭寇に際しても亦た同樣に祭祀してその加護を祈念したに相違ない。

而して朝鮮に於ける武神關羽は其後靈異的な關聖教とまで進展するが、同樣に當時滿洲各地に關羽崇敬が流布して滿族特有のシャマン信仰と習合し關羽はその神位中に優位を占めることゝなるのである。

萬曆朝鮮之役は明朝衰頽の要因となりて爾來十數年內外愈々多端綱紀益々弛廢して、全國騷擾を極め上下不安に充ちて全くその歸向を失ふに當つて、只だ賴る處は神明の佑助のみであり、而して武人の加護を求め、士人の指南と仰ぎ、庶民の歸依する神明は概ね關羽であり、かくて關羽祈願の俗習は一世を風靡する。滿都の子女が渴仰する月城廟神の大帝に昇格するのも畢竟此の世相動向を反映するものに外ならない。

萬曆四十二年十月十一日、司禮太監李恩が勅命を奉じて月城廟に到り、神位を三界伏魔大帝神威遠鎭天尊關聖帝君に封じた。[22] 此の帝號贈封の由來については明末の沈德符は「或云上夢有異感。進此銜名。未知果否。[23]」と誌して、一種靈異的附會を試んとして居るが勿論正確を期し難い。然しその眞相は『續文獻通考』に當時君寵を恣にした太監林朝の奏請に基き詞臣の撰擬に據るものでないと、[24] 誌してあることから概ね之を窺知し得るのである。蓋し此の封號は中央官廟たる白馬廟に於けるものではなく、民衆中心の財神廟たる月城廟に賜授されたことも異例であると共に、其の字面の道教的なることは特に注意を惹く點であつて、想ふに當時專橫を極めた宦官と狡譎なる道士との合作に成ることは猶ほ往年解縣關聖廟帝號賜與の經緯の如きものがあらう。斯樣にして關羽の祭祀は明初從祀の地位から離脫して、京師に單獨官祭祠廟創建せられて、文宣王孔子と稍同格の地位を占めたのであるが、この關係は茲に揚棄されて關羽は更に一頭地を拔いて帝位に卽くと共に、宋の岳飛を道觀伽藍神たる道壇之三界祇魔元帥に据へ、唐の尉遲恭を佛寺

伽藍神に充てゝ、[25] 道佛二教の守護神たる關羽の傳統的舊殼から蟬脫して至高獨尊的地位を占めるが、それは嘗て二十年前に解縣關聖廟に端を發する帝號の延張擴大であつて、地方から中央への進出とも見られる。而して民衆的財神たる月城廟を舞臺とするこの跳躍は、官祭の本宗たる白馬廟に基礎を置く嚴肅莊重な祀典上の儀禮ではないから、公明正大な安定性を缺失して居る。其の後十年を經て熹宗天啓四年、官祭祝文に帝號を使用することに改めて稍調整されては居るが、要するに姑息なる繕縫策であつて、此の跛行的不安性は清初に到つて漸く緩和される。但し萬曆末年の關羽祭祀は祀典上の難點はあるにしても、士民日常生活上必須にして又恐らく唯一最高の守護神であり財神であることは、當時既に謝肇淛が「今天下神祠香火之盛。莫過於關壯繆。[26]」と記する點からも知られる。而して中央・地方代表祠廟の隆昌を極める明代中期がその全盛期であるとすれば、月城廟に帝號賜授の明代末期は既にその爛熟期とも稱すべきであらう。

註① 『明史』五〇、禮志。
② 『明史稿』禮志。
③ 同上。
④ 『續文獻通考』七九、群祀考。
⑤ 『日下舊聞考』四四、(白馬)「關帝廟碑」。白馬廟又は白馬關帝廟の廟名由來については未だ信憑すべき定說はない。
⑥ 同上。
⑦ 明初原封に復した時は壽亭侯と稱したが、其後世宗嘉靖十年、その誤謬なることを認知して之を訂正すると共に、漢前將軍漢壽亭侯と更改する。(『續文獻通考』七九、…群祀考。)

⑧『明史』五〇、禮志。

⑨明代の關羽祭祀期日については南輅は「每歲正旦冬至及朔望祭祀。」と誌し、『李朝實錄』宣祖三十一年五月丙申（十二日）の條に「四孟歲暮及其生辰皆遣官致祭。」とあつて兩者一致を缺き、尙ほ淸代祀典の春秋二季及五月十三日正辰大祭とも異つて居る。明代は未だ恒常的祀典を制定するに到らなかつた樣である。

⑩『關聖陵廟紀略』二。

⑪『湖北省通志』一八、古蹟。

⑫『關聖陵廟紀略』二。

⑬同上。憲宗成化十七年太監梁芳の奉詔祭文に「建於有宋。勅命靈魂。復統陰府之兵。勦滅蚩尤之惟。妖氣旣絕。旱虛隨消。天降甘霖。池水若鏡。生民獲利……」。

⑭『關聖陵廟紀略』二。解州武安王廟卽ち關聖廟について「偏爲崇寧宮一區。居道士若干人。」とありて、崇寧宮は關聖廟の別名であることが知られる。而して道士張通源又は張通元とあるのは正しくは張通玄であるが、淸朝康熙帝の諱は玄燁であるから、同帝以後玄字を憚て源又は元を以て之に代用するものと想はれる。

⑮協天護國忠義大帝は Henry Doré; Researches into Chinese Superstitions, VI. p. 80. にあるが未だその原本を詳にしない。協天の稱號は朝鮮京城の南關王廟々前懸旗の一に「協天大帝」とあり、又我が『和漢三才圖繪』六二・地理に「大明萬曆中封爲南極協天上帝。」とあるのは一脉相通ずるであらうが、未だその由來を明白にするを得ない。

⑯『觀堂外集』「元人隔江鬪智雜劇」。

⑰『宋元戲曲考』三、「宋之小說雜戲」。

⑱『燃藜室記述別集』四。

⑲『李朝實錄』宣祖戊戌（三十一年）四月己卯（二十五日）。『燃藜室記述別集』四。

⑳『李朝實錄』宣祖己亥（三十二年）六月己亥（六日）。

㉑『燕藜室記述別集』四、「未幾倭首秀吉死。諸屯者撤去。此亦理之難測者也。……況關王剛大之氣。安知無神應耶。」とあつて秀吉の死去も亦關羽の靈驗と看做されて居る。

㉒帝號については『關聖陵廟記略』二、及び『續文獻通考』七九、「群祠考」に略記する以外に『明史』等には見當らない。

㉓『野獲編』一四、禮部「加前代忠臣謚號」。

㉔『續文獻通考』七九、「群祀考」。

㉕『陔餘叢考』三五、「關批繆」。

㉖『五雜組』一五。

五　清代整頓期

清代に於ける關羽祭祀中特に注意を惹くものは、明末の安定を缺く跛行的關羽帝號を肅正し、地方官祭廟制を設けて中央官祭廟との本末關係を明かにして以て全國官祭を統一し、且つ由緒ある三廟に特別制度を設け、かくて官祭上の統制を計ることがその一、月城廟が道教的祭祀中心廟として特殊性を發揚することがその二、而して財神としての關羽信仰の普及することがその三である。

一、滿洲から崛起した清朝は入關以前の盛京首都時代に於て既に關羽祠廟を勅建した。卽ち清の太宗は崇德八年(一六四三)盛京地載門外西北五支里の教場に廟宇を建立し「義高千古」の扁額を賜與した。① その位置が演武場であつて額面の字義が忠武の賞揚であることから、同廟は武神としての關羽を奉祀する爲めであることは想像に難くない。但し當時清廷が既に滿族特有なるシャマン祭祀に奉祀する神位中、朝神として關羽を釋迦・觀音と共に優位なる地位に据ゑたこと

は、上記の様に既に關羽尊崇の風が弘く滿洲に流布してその祭祀祠廟が各地――殊に南滿要地――に散在することが、滿族個有信仰に影響してその特殊祭儀に習合した結果に外ならない。

清朝が中原に君臨してからの首都北京に於ける關羽祭祀は明代のそれと大略同樣で、白馬・月城の兩廟は依然二大代表の地位を占めるが、然し兩朝の間には又多少の特殊性も認められる。順治元年北京に奠都すると白馬廟を復興して五月十三日官祭を施行する制を布き、②翌二年その告成を俟つて五月十三日中原君臨後最初の官祭を擧行した。其の後順治九年四月關羽に「忠義神武關聖大帝」の封號を賜與し尙ほ夫子とも稱してすべて公式に之を使用せしめた。但し月城廟に限り明末の封號を多少更改調整して、その神位を三界伏魔神威遠鎭天尊と稱した。かくて明末に於ける大帝封號は解縣關聖廟又は月城廟中心であつて、白馬廟とは直接關係のなかつた跛行的不安定性を解消して、此れ等代表的な各廟間相互關係の調整を計つた。其の後世宗雍正三年一七二五四月關羽の父祖三代を公爵に封じて白馬廟後殿に奉祀し、尙ほ同時に解縣關聖廟と洛陽塚廟とを官廟たらしめると共に、各地方州縣にも官祭廟を設置し、五月十三日の官祭以外に春秋二季の祭典を增加した。③此の新設地方官廟は明代以來各地に存在する、道敎・佛敎又は喇嘛敎所屬等の關羽祭祀祠廟中から、殿宇の比較的整備したものを、地方各縣每に一廟宛選擇したものである。かくて白馬廟は恰も此等地方官祭祠廟の本宗たる觀を呈し、夫の北京の文廟と各州縣のそれとが本支の關係にあるのと同樣の關係が發生して、全國的に關羽官祭の統制を計り得ることゝなつた。此の統制と同時に洛陽在住の關羽の後裔を五經博士となし、縣南塚廟の祭祀を司らしめ且つその職務を世襲せしむる制を布いた。この五經博士制をその翌年解縣關聖廟へ、

更に同十年當陽縣關帝陵廟へも布いた。白馬廟は一般祠廟と同樣にその祠殿並に大門は從來綠瓦を使用して居つたが、乾隆三十三年始めて皇城宮殿と同樣に黃瓦に改めるから④同廟は愈々其の特殊性を發揮して清朝關羽の祀典も茲に大成する。但し乾隆以後歷朝その封號を追加し、且つ咸豐三年中祀に昇格するのも亦た、清朝祀典の特徵をなして居る。乾隆以後光緒に到る間に逐次封號を增加した結果關羽の神號は次の樣になる。

忠勇神武靈祐仁勇威顯護國保民精誠綏靖翊贊宣德關聖大帝⑤

此れ等封號賜授の對象となるのは祀典上の中心をなす官祭祠廟の本宗たる白馬廟の神明に相違ないが、同廟は德教的儀禮的國祭祠廟であるからすべて神怪なる迷信的附會說を排斥する傾向の强大なことは、同廟の乾隆御製碑に「其他稗野所載怪偉荒忽事蹟。不見正史者闕而不書。懼褻神並誣聖也⑥」とあることから推定されると共に、又幾多「不見正史」の靈異說が同廟にも存在することを裏書きする。此れ等封號は字面の上から概ね武神關羽の威德尊崇の結果と推定されるが、然し事實上神明の靈驗的加護を賞讃する場合も尠くない。封號賜與の事情を調査すると次の通りである。

忠義神武	世祖順治九年四月	明代帝號の肅正調整の爲めであらうが未だ適確な資料を寓目しない。
靈祐	高宗乾隆三十三年三月	雍正中臺灣事變に靈驗があつて速に平靖した。(『清俗紀聞』六。)
仁勇	仁宗嘉慶十九年正月	天理教匪之變に滑城剋復に際し靈驗があつた。(『清朝實錄』同月四日。)
威顯	宣宗道光八年正月	回匪・張格爾叛亂に際して靈佑があつた。(『清朝實錄』同月二十三日。)
護國		

保民	文宗咸豐三年六月	髮賊之亂に河南省城解圍に當つて神助があつた。（『清朝實錄』同月十八日。）
精誠		
綏靖		
翊贊	穆宗同治九年二月	前代回匪討伐中河南省城に於て神助があつた。（『清朝實錄』同月十八日。）
宣德	光緒五年十月	「神靈顯應」する。（『清朝實錄』同月三十日。）

以上十種中、護國・精誠・綏靖の三神號は髮賊亂中の賜號と想はれるが未だその由來を詳にするを得ない。保民封號と同年の十月、同廟を群祀中から中祀に昇格したのも、髮賊亂中關羽の「顯佑昭々」⑦たるものがあつたからである。斯樣に清朝歷代の封號は內亂掃討の爲め國祭官廟祈願に關聯して居り、嘗て北宋以來外難艾蓂の爲めに玉泉寺顯烈廟に於て祈願報賽した時と、形式上多少の相違はあるにしても、祈願報賽の實質的本旨に到つては概ね同樣であつて、何れも禍亂の清掃に當つて、神明の加護を欣求し報賽するものである。然し表面的には擧國全力を傾倒して時艱克服に邁進すると共に、猶ほ且つ神明の加護をも希ふ儒敎的國祭的祈願の樣にも想はれるが、實際的には寧ろ怪力亂神をも利用してより多く效果的ならしめんとする、打算的功利的欲望に基くものと考へられ、此の傾向は擧國外難に沒頭した宋朝よりも、滿漢兩族の不調も絡み合つた清朝に於ては、更に一層甚しかつた樣に思はれる。而して此の種の欲求は白馬廟よりも寧ろ月城廟に合致する點から、白馬廟の月城廟化とも謂ひ得るのである。

二、清代の月城廟は概ね明代の傳統に過ぎない。萬曆末葉に賜與された不安定な跛行的封號は順治九年に肅正され

官祭祠廟の神號以外に此の廟の神位に限り、三界伏魔神威遠鎭天尊てふ道教的封號が特授されて名實共に道觀的特殊性が確定した。元來北京內城に九門ありて各門月城に關帝廟は存在するも、獨り此の廟のみが興隆して代表的地位を占めるに到つたのは、交通頻繁な要路に當つて地の利を占めて居るからで、五月十三日の祭典には市民雲集して賽香殷賑を極め、清帝も亦南郊の禮を畢つて還幸入城の際には必ず禮拜する恒例であるから、他の月城廟は元より一般關羽廟とも異つて名實共に特權的地位を占有して、官廟以外の全關羽祠廟の本宗代表たる觀があり、民俗的信仰の中核をなす樣である。

三、關羽祭祀祠廟は元明時代から各地に開設されてゐるが、清代に到ると一層其風が盛になり、凡そ漢族の居る處、如何なる山村僻陬の寒地と雖も、關帝廟の存在せぬ處は無い樣になり、首都を始め各大都市に多數の關帝廟が出來た。但し建設の多いと共に荒廢も亦夥しい彼の地に於ては、明代より果して幾何の增加をなしたか、計數的に之を明白にするを得ないが、實質的に進展してゐることは上記白馬廟を樞軸とする、各縣一廟卽ち全國約一千六百の地方官廟の設置の點からだけでもよく窺ひ知られる。而して此れ等祠廟祭祀の目的は形式上白馬廟が代表するにしても、實際的には月城廟であり、同廟は弘義の財神として明代に於けるよりも一層有意義となつて居る。地方關帝廟の多くは道教又は佛教に所屬し稀には喇嘛教に屬するものもあるが、凡そ儒・道・佛の各教は明末―十七世紀―以來互に相ひ習合混同する傾向が强大となつて、現に觀音堂に道士が奉仕したり、道觀に佛僧の止住する場合も尠くないと共に、佛僧・道士の祭祀する關羽は其の間多少色調を異にするにしても、要するに一般民俗的要求は等しく安住福祉にあるから、

此の欲求に應ずる關羽は財神であつて當然道教的色彩は濃厚である。假令本來は武運長久を祈願する武神にしても、寺觀に奉祀する伽藍神にしても、將又國家的儒教的關羽祭祀の代表祠廟たる白馬廟を始め各地の官廟にしても、凡そ上下貴賤の別なく、若し各自の安生幸福祈願の爲め香華行禮する對象となれば、その神位は同じく一財神であり、その祠廟は同樣に道教的財神廟と異らない。かゝる祈願は清代一般の風潮をなして北京景山に在る關帝廟も亦清廷宮人等の爲めに同樣の役割をなしたことは想像に難くない、但し護國忠義廟とも稱するから本來は武神廟にしても。

かくて清代關羽祭祀は一方白馬廟を中心に天下の官廟を統理すると共に、又他方に月城廟に基調を置く財神的信仰が一世を風靡する。前者は國祭的儀禮の人爲的統制であるに對して、後者は民俗的信仰の自然的歸趨であり、兩者は對蹠的に相乖離する傾向は漸次顯著となつてゐる。

註① 『盛京典制備考』二。
② 『皇朝通志』四一。『皇朝文獻通考』一〇五。
③ 『清朝實錄』雍正三年四月庚申(三日)。
④ 『日下舊聞考』四四。乾隆四十六年「御製重修(白馬)關帝廟碑記」。
⑤ 『光緒大清會典事例』三五。
⑥ ④と同じ。
⑦ 『養吉齋叢錄』七。
⑧ 『日下舊聞考』四三。
⑨ ⑦と同じ。

⑩『關聖陵廟紀略』二。

六　結　語

一、中唐以後當陽縣玉泉寺內奉祀の一私廟神として發祥した武神關羽は、やがて佛教伽藍神てふ特殊の資格をも帶びるが、宋代に到るとその國難に際してよく鎭護の任を完くするものと認められて王號を賜與され、士民尊信の點では官祭祀典上武神の主位に在る武成王呂尙をも凌駕する。元代には進んで佛教監壇てふ獨特の地位を占めることが、やがて道教に反映して道教神明として擡頭し當陽縣の佛教的樞軸に對照する解縣の道教的中核が興隆して、道佛二教の代表的祠廟となつた。明代になると京師北京城內に儒教的國祭祠廟たる白馬關羽廟が創設され、上記道佛の代表廟と並びて天下三代表廟鼎峙の偉觀を呈して關羽祭祀の全盛期となり、更に關羽の財神信仰が一世を風靡すると、その中核をなす北京月城廟が飛躍的發展をなし、關羽の神位が獨尊的帝位に卽き、關羽信奉の變態的爛熟期となるのである。此の變態は淸初調整されて一方白馬廟中心の全官廟共通の帝號賜授となり、他方民俗的信仰の樞軸をなす月城廟獨自の道教的天尊號許容となりて兩號並存する。但し帝號は其の後普遍化して、凡そ關羽祠廟は官私を問はず總て之を關帝廟と稱する。而して民國に到つて儒教的官祭祠廟は岳飛廟と併合して關岳廟と變改するから、形式的には單獨官祭祠廟は解消して、寺觀の伽藍神以外の關羽神明は主として財神的單獨祠廟が存續することゝなる。斯樣に關羽祭祀は當初の國家的武將崇拜から、宗教的武神卽ち伽藍神となり、更に民俗的財神へと變遷して、民俗的信仰と國家的

祭祀との特殊關係を具有することは、弘く宗教史上より視て祭神變遷の一典型をなすものであらう。而して武成王呂尙に嗣いで武神の地位を昂揚せしめ、更に伽藍神又は財神に進展して獨創的光彩を發揮して居る。現下事變に際して關羽の崇敬信仰は如何なる情況であらうか。上記代表祠廟は概ね皇軍勢力圏内に歸屬して居る。此の際その史蹟並に崇敬の實狀を調査し得るならば、その過去の變遷を研究する上に裨益するのみならず、將來の對策攷察に際して貢獻する處寔に多大なるものがあらう。①

二、關羽は祭祀上屢々孔子と比較對照され一面に於ては兩者を同格對等視すると共に、又他面には强ひて兩者を差別待遇する傾向も認められ、その關係は頗る明晰を缺いてゐるから、更に兩者に就いて一瞥する必要がある。

唐肅宗上元々年孔子の文宣王廟と呂尙の武成王廟とを對等同格ならしめて以來、明初に至るまで武成王廟に從祀せられる關羽は文宣王と形式上同格で無いことは既に述べた通りであるが、武成王廟廢止以後に一武神として創設された關羽廟を孔子の文廟に對照して代表的武廟と看做し、之と文廟とを同格視する傾向が甚だ顯著である。明成祖永樂八年孔子廟を文廟と改稱し、清順治帝は中原に進出すると、明制に則つて文廟の制を布くから、明清時代に於て文廟てふ公稱は存在するが未だ嘗て武廟の制を布かれたことがない。然るに順治九年關羽に夫子てふ孔子と同樣な尊稱を用ゐ、世宗雍正三年各地方州縣の官祭廟を選定して北京の白馬廟と本末の關係にあること恰も文廟のそれと同樣ならしめ、或は一部民間には關羽をも文神②として尊崇するなど、兩者には類似又は共通點が尠くないから、清代に於て兩者を同格視して時には關羽祠廟は武廟とも稱せられた樣であるが、然しそれは制度上の公稱ではなく又兩者は同格で

もなくして、清朝祀典の上では却つて孔子は概ね關羽よりも優位を占めて居るのである。即ち文廟は清初以來中祀であり、宣統二年一九一〇十一月大祀に昇格するに對して、關帝廟は咸豐三年一八五三十月群祀から中祀に昇格するから、兩廟が同時に中祀であるのは僅か五十餘年間で、それ以外の清朝約二百六十年間は常に孔子は關羽よりも優位である。明代に於ける兩者祀典上の地位は未だ詳にしないが、明末に於ける關羽の飛躍的進展以後に於ても、尙ほ且つ斯樣に孔子は優位にあるから、それ以前に於ても亦勿論同樣であつたことは想像に難くない。故に關帝廟に就いて「祀典亞於文廟。俗謂之武廟。③」とあるのは正鵠を得て居り、兩者を祀典上對等視することは誤謬であり關帝廟の武廟と稱せられるのは便宜上の俗稱であつてその正號ではない。但し祀典上關羽は孔子よりも低位であるが、士民信仰上孔子よりも優位を占めることは注意を要する。

關羽は明末大帝の榮位に卽き、淸代に到つて屢次その封號を追賜される點から、文宣王たる孔子よりは一段優位に在り、又淸世宗雍正三年地方州縣の官祭廟を在來の私廟中から選擇する點などから視て、官祭のみに限られた文廟の實數よりも遙かに多數の關羽祠廟が存在し、從つてその崇敬信仰が一層旺盛であることを裏書きする。斯樣に祀典上の關羽の地位と實際祭祀のそれとは一致を缺いてゐるが、此の事實に關しては更に一歩を進めて兩者比較の基調根底について攷察する必要がある。孔・關比較論者中には往々正鵠を得ないものがあつて明中期の徐階も亦その代表的のものである。彼は孔子の聖德と關羽の忠義とを對照して「孔子述文經。垂訓萬世。感人以功德。王(關羽)感人以忠義。其廟遍天下固宜也。④」と誌して關羽祠廟の天下に普及するは直接その忠義に基因すると誌して居るが、關羽崇敬は武神

たるその忠義の點にのみ直接基因するものでないことは上來屢述する通りである。孔子の德教は謂ふまでもなく漢代以來政教の基本樞軸をなして居り、萬代不易の綱常であるに對して、關羽の忠誠は三國以後武神として崇敬される所以であるが、宋元に到ると戰時救護の武臣であると同時に、平時招福の財神ともなつて、篤く上下の歸依する所となり明清時代に於て關羽祠廟の普及するのは財神信仰の透徹に基因すること頗る多大である。然るに財神又は伽藍神たる關羽尊崇の由來を無視して單に武神として崇敬される關羽と德教の樞軸たる孔子とを比較考覈せんとするのは元よりその均衡を失して居り、關羽に對する皮相的形式的偏見に墮するもので、かゝる謬論は獨り徐階のみに限らず往々寓目する處である。

然るに孔子の文廟に對して關羽祠廟は同等又は同等以上に發展して居ることは明白であり、且つ又孔子の德教以上に關羽の民族的崇敬が昂揚して居ることは周知の事實であるに關らず識者の間には强ひて關羽の祀典上の地位を抑制して孔子以下となすを是認し、又は德教の孔子と財神たる關羽とを比較すべき場合にも、却つて之をその忠義にのみ限定するのは、要するに儒道二教を比較することを故意に忌避する民俗的特殊傾向であつて、所謂道教に卽する實生活を儒教を以て粉飾し糊塗する揚儒抑道的通有性とも謂ふべきものが、此の場合に於ても濃厚に發露して居るやうに推定される。

三、關羽信仰の發展普及と密接な關係ある「護國關王妙經」⑤など關係經文の發生、關帝護符の流布、及び關帝籤の普及等に就いては、他日更めて起稿することゝし、唯だ茲に關帝籤が德川時代に我が國へも渡來し、碩儒新井白石が

子女婚嫁問題解決に資する處あつたのは現に彼の地に於て弘通してゐる「關帝籤第十八、⑥中平」であり、彼が土肥元成の旅行を祝福するに當りて同「第五十二、上吉」⑦を利用して居ること、白石の頃から約七十年後に出版された『清俗紀聞』⑧に、關帝籤に就いて比較的詳細に記述することから推して、當時未だ恰く流布して居らなかつた樣にも考へられるが、關帝籤と組同種の觀音籤が古くから普及して居るから、或は一部人士の間には相當注意を惹いた樣であること、並に關帝籤は鎭宅靈符神籤として現に流用されて居ることを附記して擱筆する。

註① 解縣關聖廟に於て昨秋十月十一日から二十日まで、十日間に亘つて復興後の秋季大祭が盛大に擧行されたさうである。(昭和十五年十月二十日刊、福岡日日新聞)現に運城警察署々長として皇軍と協力して地方治安の責に任ずる關忱(字念先)氏は關羽五十九世の後裔であるが、今は關羽に關係ある何等の資料をも藏しないとのことである。同氏は多分清朝制定の解縣關聖廟の祭祀を司る五經博士家の一族であらう。

當陽縣城は昨春宣昌攻略大戰の際、蔣軍の一根據地であつて殲滅戰が行はれた樣であるから、城外程近き顯烈・顯佑の二廟は果してその災禍を免れ得たのであらうか、未だ詳にするを得ない。

② 關羽は平素『左傳』を愛讀したとの傳說に因みて文神として尊崇され、その神像畫も現に流布して居るが、未だその由來を詳にしない。彼が『左傳』を愛讀した傳說は康熙年間刊行の『關聖陵廟紀略』に特記されて居るから、多分清初以來文神として民間一部の尊信する處となつた樣であるが、未だ文神として祠廟を建立して祭祀するには到らない樣である。

③ 『辭源』武廟。

④ 『關聖陵廟紀略』三、徐階「嘉靖三十七年重建義勇王廟記」。

⑤ 『大明續道藏經目錄』中に「太上大聖期靈上將護國關王妙經」一卷とあるのは恐らく關羽信仰に關する道教經文であらう。尙ほ朝鮮關聖敎に關する經文と想はれるものが、多數『關聖帝君開化大程全集』に載せてある。

⑥『新井白石全集』第五・三九〇。

⑦ 同上 第五・一五二。

⑧『清俗紀聞』六。

追記——本文脱稿以後筆者の寓目した参考文獻中、康熙三十一年の序ある『關聖帝君聖蹟圖志全集』、『關聖帝君覺世眞經靈應篇』(寛政三年版)及び『燕都叢考』(民國二十年版)は何れも裨益する處尠くないが、就中最初の『關聖帝君聖蹟圖志全集』卷四「藝文考」にある宋元祐七年解州知州張東之「重修關帝廟記」に據ると解縣關聖廟は北宋哲宗元祐七年の重修であるから、本文中「哲宗元祐壬申の勅修と稱する開基說は元より信憑するに足らない」(五七頁參照)は再考を要することであり、又同書卷三「靈應考」の嘉定・太倉等の捍倭紀績から、明世宗嘉靖の頃の中支江漸地方に於ける所謂倭寇に際して高潮した關羽靈驗說は關羽信仰の隆盛を反映し、やがて起る萬曆朝鮮之役に於ける關羽崇敬と同系に屬してその源流をなして居る樣に想はれるが、尙ほそれ等の確否については後日更めて檢討考覈したい。

一六、四、七、